病気になっても患者になれない

Yさんの早すぎる死

他の病院で内臓のがんで余命は6ヶ月と言われたＹさん(56歳女性)が、札幌病院の相談室を訪れたのは11月6日でした。

Ｙさんは非正規で働く長男(32歳)と、授産施設に通う27歳の長女との3人暮らし。ビルの清掃で働くＹさんの手取りは月9万円で食べていくのがやっと。国保料も滞納し短期保険証、家賃も数ヶ月滞納し、150万円ほどのローンも抱えていました。「家族3人が食べるだけで精一杯なんです。抗がん剤治療のお金はありません」と言います。前病院も「自分の寿命が6ヶ月なら延命治療は必要ありません。痛み止めだけを処方してください」と治療を断っていたのです。

「がんと告知された時の衝撃は言葉で言い表せない‥‥」告知後、毎日寝る前に「明日の朝は目が覚めるだろうか」夜中に何度も起きては泣いた。「自分が死んだ後、残される障害者の娘の孤独を思うのが一番つらい‥‥」

Ｙさんは「経済的に苦しく医療費を用意できません。借金もあるし、動けなくなるまで病院よりも仕事に行くつもりです」と言い、病魔を抱えながら働いていました。

息子さんから電話があり、Ｙさんは12月2日に急逝されました。「うちが貧乏なので母は病院に行こうとしなかったんです。お金があったらもっと長生きしたかもしれない」息子さんが声を詰まらせました。生活保護を申請していたのですが、開始決定となったのは、Ｙさんが亡くなった翌日の3日でした。

札病医療福祉課「相談日誌から」引用しました

痛みをこらえて仕事をしている

夫は建設業をしていたが倒産した。ある日夫が足を骨折。近くの病院にかかり手術を勧められたが、10万円かかると聞いて帰ってきた。

病院から手術をするように電話が来たが、行かなかった。お金が大変なので自然に治すと夫は言っている。痛みをこらえて、がまんして仕事をしているようだ。命を守るステッカーを見せ、医療費を心配せずに受診してほしいと渡してきた。

（中病の訪問から）

沖縄の空はアメリカのもの－07年平和大会に参加して

芦別診・上田楓さん

芦別平和診療所　事務　上田　楓

11月23～25日で平和大会in沖縄に参加してきました。全国から約1300人（海外からも韓国やアメリカの代表が参加）が集まり、平和について考え行動する集会です。

2日目、米軍の基地建設で問題になっている辺野古の海で、現地の人と一緒に基地建設反対の座り込みをしてきました。この日は、50名ほどが座り込みに参加したため、とても静かな一日でした。普段の海でのたたかいはとても過酷なもので、海中では、鉄パイプや金槌で容赦なく叩いてくるようなこともしばしば。本当に体を張って海を守っていました。

基地建設は、絶滅寸前のジュゴンやその他の動物、自然を破壊する行為ですし、戦争の前線に一番初めに行く部隊が訓練する場所を日本のお金で作るなんてとんでもない事だと思います。

3日目最終日は、人間の鎖で基地を取り囲みました。北海道代表団は、端っこにいたので、全容はよくわかりませんでしたが、貴重な体験をしました。

もう一つ、印象に残ったのは、沖縄県の空はアメリカのもの、という話。米軍の飛行訓練は自由に行えるのだそう。地上350～600M（だったか）は自衛隊が使う空域で、その下を一般の旅客機が飛べる（７回くらい旋回しないと空港に着陸できない）のだそうです。

他に、沖縄戦の話などもたくさん聞きました。とてもキレイな島ですが、とても危険な島となっていることに悲しさを覚えました。へいわ　についてよくよく考えさせられた3日間でした。

共同デスク

No.４５３　2007年12月４日

北海道勤医協本部組織広報部
TEL 823-0867fax821-3701